新春

博物館館長が語る

土浦土屋氏の濫觴（らんしょう）
―中世武家のふるさと―

糸賀茂男

土浦市立博物館館長
上高津貝塚ふるさと
歴史の広場館長
常磐大学 名誉教授

皆さま、なかなかコロナ禍を払拭できないなかでの新年でございます。続いて感染無きよう念じます。

さて、今回は「土浦土屋氏」の濫觴（らんしょう）、すなわちルーツについて考えます。土浦藩主土屋氏が、鎌倉時代のころから戦国時代まで長きにわたり、甲斐国武田氏の家臣として経過したことは広く知られています。その子孫が運良く徳川氏に厚遇され、さらに「大名」に取り立てられたことは、令和2年開催の博物館第41回特別展示「土浦城」で紹介いたしました。

一方昨年は、「鎌倉殿の十三人」による鎌倉武士の大ブームがあり、小田城の初祖とも言われる「八田知家」も初めてテレビ画面に〝お目見え〟しました。実は土屋氏も同様に「鎌倉御家人」の一人であり、かの「甲州軍団」土屋昌続にも、相模国の武家としての前史があります。

〈中村から土屋へ〉

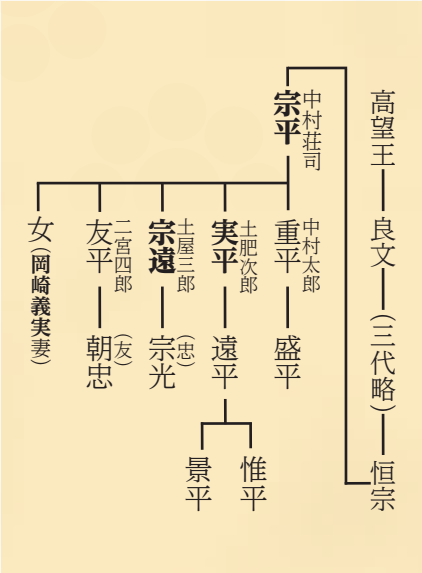
「鎌倉武士」の数は、関東（東国）に限っても、個々にその居住地名を苗字とする数百家におよび、また、相互の通婚があったことから、氏族間の関係はまことに複雑です。

土屋氏の居住地である「土屋」という地名は、相模国大住郡土屋郷（土屋荘）であり、現在の神奈川県平塚市の「土屋」にあると推定されます。

そしてその系譜は、相模国余綾（よろき）郡中村郷（中村荘、現在の小田原市から北方の中井町にかけた、中村川一帯と思われる）に住んでいた、桓武平氏流を自認する中村荘司（しょうじ）宗平（むねひら）の子息である、三郎宗遠（むねとお）を初祖としています。つまり、中村郷から土屋郷へ転出したことが分かります。新天地に入部し、後に源頼朝と主従関係を結んだわけです。宗平も宗遠も、「御家人」として、鎌倉幕府から新たに居住地の「地頭職（しき）」に補任されたのです。なお、宗遠

甲斐土屋昌続（まさつぐ）（右衛門尉）

土浦藩主土屋家の先祖とされる
（推定1545～1575年）
武田二十四将図（部分）（土浦市立博物館所蔵）



中村氏系図

の立場は父親同様「荘司」であったと考えられています。「荘司」は、地頭職補任以前荘園の現地での徴税を任務としていました。

〈鎌倉殿と土屋氏の関係〉

『吾妻鏡』に宗遠が初めて登場したのは、治承4（1180）年8月20日、挙兵した源頼朝の相模入りに従軍したという記載です。宗平についても、同年10月18日に、早々に頼朝の家人として従軍したことが記載されています。また、宗遠の兄であり、湯河原町土肥を拠点としていた土肥次郎実平（さねひら）も、治承4年8月9日に頼朝が挙兵した際の枢要な家人の一人としての記載があります。さらに、宗平の娘婿であり、三浦氏族として伊勢原市岡崎を拠点としていた岡崎義実（よしざね）も記載されていました。

つまり、中村氏族は桓武平氏流でありながら、頼朝挙兵時という早い時期から源頼朝に勤仕し、「御家人」としての武家の立場を構築しました。これが、彼等氏族がこの時点で行った「世過ぎ（世渡り）」の判断です。「土屋氏」の鎌倉武家としての立場は、帰属していた氏族全体の中で見るべきで、その「ふるさと土屋」の光景

- 地形（座禅川）
- 遺跡（居館）
- 氏寺（芳盛寺、供養五輪塔）
- 土地の小字（「惣領分」「庶子分」など）

は、直接訪れて確認してみてはいかがでしょうか。

甲斐国では、釜無川流域（南アルプス市徳永一帯）が「甲斐土屋氏」の拠点ですが、これは別の機会で改めて紹介します。「土浦土屋氏」の濫觴を考えることは、江戸時代の武家を理解する上でも必須の作業であり、鎌倉武士の系譜をひく武家の盛衰史こそ、歴史研究の眼目と思います。

改修工事のため、昨年に引き続き博物館は年内休館ですが、この間にも、土浦市域の歴史・文化研究は続行あるのみです。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

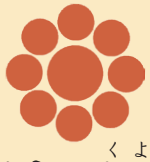
では私の年頭の発句です。

生（は）えの地を　名に負う春の　吉事（よごと）かな

相模国略図

土屋家　三石紋

3つの石からなる紋。
石畳ともいう。



土屋家　九曜（くよう）紋

中心が太陽、周りが星。
厄除けに通じる。

＜本記事の参考文献＞
永井路子「相模のもののふたち…中世史を歩く」　有隣新書　1978年